

報 告

社会福祉学部における5年間の活動と課題

Research, education, and practice of my five years at the faculty of social welfare,

Kansai University of Social Welfare

谷川 和昭

要約:筆者が関西福祉大学という4年制大学に身を置いてから5年が経過した。この5年間で「研究」、「教育」、「社会活動」の3側面から振り返ることが本稿のねらいである。まず研究では、「著書」、「論文」、「学会発表」からの業績分析を行っている。次に教育では、「講義」と「演習」のうち特に後者に力点を置き、なかでも“卒業論集”の足跡について整理している。続く社会活動では、学外関係者とのつながりの貴重さと裏方としての役割遂行に対する想いについて述べている。以上の振り返りから、これまでの蓄積に加えて、社会福祉学徒としての深厚性のある教育と研究を志向している。

Key Words: 関西福祉大学, 研究, 教育, 社会活動

はじめに

筆者が関西福祉大学社会福祉学部専任講師として職を得てから、2008年9月末でちょうど丸5年を迎え、本誌が10周年記念号であることに託けて、筆者自身の5年間の振り返り機会として本稿をまとめてみることにした。振り返りの順序としては、研究、教育、社会活動の順とし、今後における中期的・長期的な教育研究の展望を描く何らかの手がかりが得られればと考えている。

I. 研究

研究成果については年に数回、「教育研究業績書」に加除修正を加えてきているが、ここでは社会福祉学部へ赴任してからの過去5年間分に絞って数量的に集計してみた(表I)。ここに示されているように、2003年10月から2004年9月までの業績の総数は著書16冊、論文14本、学会発表12回であった¹⁾。以下、5つの時期に区切って分析しておくことにする。

2003年10月～2004年9月(1年目)

1年目の研究成果は、著書1冊、論文2本、学会発

表3回であった。着任1年目であるので、ある意味見習い期間といってよいのだが、著書『対人援助の基本と面接技術』²⁾が無事に刊行されたことが思い出深い。この出版企画に筆者は元々参加していなかったのであるが、執筆候補の一人が多忙等の理由で辞退されたことにより、お鉢が回ってきた仕事であった。「面接技術」がタイトルに入った文献はさほど見受けられないことから、本書は一定の希少価値を有するといえる。短期間での執筆作業ではあったが、当時としてはよく集中できた。内容としては、対人援助に携わる専門職が、そのアプローチの中で用いる面接技術を理解し、実際に展開できるように構成されている。学会発表については、韓国臨床社会事業学会創立国際学術大会での発表を経験した³⁾。同学会大会誌ではレジュメではなくフルペーパーが、日本語と韓国語の両方で掲載されている。発表形式も日本の社会福祉系学会のように1報告につき1質疑応答という形ではなく、複数の研究者の報告が終了した後に、合同で質疑応答するもので、非常に新鮮さを感じた。

2004年10月～2005年9月(2年目)

2年目の研究成果は、著書3冊、論文5本、学会発表2回であった。自身初めての編著『地域福祉分析論』⁴⁾が発刊されたのもこの2年目である。3期にわたって授業のための教科書としても採用したが、「地域福祉の体系」を述べることでできた思い入れの強い著作でもある

2008年11月29日受付/2009年1月21日受理
Kazuaki TANIKAWA
関西福祉大学 社会福祉学部

表 I. 著書・論文・学会発表の業績

		著書			論文		学会発表	
		編著	共著	共訳	単著	共著	単独	共同
1年目	2003年10月～2004年9月		*		*	*	*	**
2年目	2004年10月～2005年9月	*	*	*	**	***		**
3年目	2005年10月～2006年9月	**	****	*		***		**
4年目	2006年10月～2007年9月	**	**		**		*	*
5年目	2007年10月～2008年9月		*		**		**	*

注) *は著書冊数・論文本数・学会発表回数

ため、授業は自然と熱が籠もった。論文では、2004年11月に大韓民国で創設された大韓ケア福祉学会から執筆の依頼があり、機関誌『大韓ケア福祉学』に「ケア福祉とコミュニケーション技法」を共著で寄稿した⁵⁾。また、共著論文「介護福祉士養成における介護意識に関する日韓比較研究」が『介護福祉士』誌に掲載された⁶⁾。これに先達での社団法人日本介護福祉士会を母体とする日本介護学会第2回大会（於：ひと・まち交流館 京都）では反響を呼ぶ研究の1つとなり、雑誌記事にも紹介されている⁷⁾。

2005年10月～2006年9月（3年目）

3年目は、著書7冊、論文3本、学会発表2回であった。主な著書を取り上げると、編著『地域福祉の基本体系』⁸⁾、さらに研究代表者としての編著『地域福祉の概念分析』⁹⁾が発刊されたが、この他に共著『地域福祉論』¹⁰⁾も刊行されている。『地域福祉論』では「地域福祉の史的変遷」を、『地域福祉の基本体系』では「地域福祉の援助方法」をまとめているが、本学地域社会福祉政策研究所のプロジェクト研究助成を受けた『地域福祉の概念分析』については、この2つの機会が得られなければ完結しなかったであろうと思われる。著書のうち1冊は翻訳書であった¹¹⁾。論文はすべて共著だが、「学生からみた社会福祉援助技術演習の教育効果」は筆頭著者として『日本看護福祉学会誌』に掲載されている¹²⁾。また、前出の「介護福祉士養成における介護意識に関する日韓比較研究」は『大韓ケア福祉学』にも部分的に抜粋したものであるが掲載された¹³⁾。

2006年10月～2007年9月（4年目）

4年目の成果は、著書4冊、論文2本、学会発表2回であった。著書4冊のうち『社会福祉援助の基本体系』¹⁴⁾、『臨

床に必要な社会福祉援助技術演習』⁵⁾の2冊は編著である。論文はいずれも単著で、そのうち1本は『厚生指針』に「地域福祉に対するコミュニティワークの意識構造」の題目で掲載されている¹⁶⁾。もう1本は本学紀要の「社会福祉援助からみた福祉の心での支援」で、「福祉の心」をテーマとする希少な論文としてまとめてある¹⁷⁾。学会発表は、日本看護福祉学会において「社会福祉援助技術演習の教育傾向と課題」¹⁸⁾と題して共同で報告、日本福祉図書館学協会においては単独で「地域福祉要件の分析と地域福祉論の創造」¹⁹⁾について報告している。研究課題が地域福祉理論と対人社会サービスの技術により傾斜していった1年であったといえる。

2007年10月～2008年9月（5年目）

5年目の成果は、著書1冊、論文2本、学会発表3回であった。准教授として再スタートを切ることになった5年目は、著書は共著としての『地域福祉の原理と方法』²⁰⁾の1冊にとどまった。しかしながら、専門とする「地域福祉の思想と理論」をまとめる機会に恵まれた。論文では、この5年目より臨床福祉論を担当することになったことを機に、本学紀要に「社会福祉の範囲と臨床」を執筆した²¹⁾。それから「福祉の心の構造化の試み」が幸いにも日本精神保健社会学会機関誌『メンタルヘルスの社会学』に掲載された²²⁾。講演集や啓蒙書として「福祉の心」が取り上げられることはあっても、学問の対象になることがなかったことを鑑みると、この学問研究の意義は大きい。学会発表としては、「福祉の心」をテーマに日本社会福祉学会推薦により韓国社会福祉学会春季大会（単独）²³⁾、日本地域福祉学会（単独）²⁴⁾、日本看護福祉学会（共同）²⁵⁾に出席参加を果たしている。また学術集会ではないが、日本人間関係学会関西地区研修会に招かれ研究講演を行っている²⁶⁾。

表Ⅱ. 卒業論集の題目と卒業論文の目次

2004年度『高齢者の尊厳を支える介護』	
池本有美	緩和ケア病棟におけるケアのあり方
井上敏行	在宅福祉サービスにおける痴呆性高齢者の効果的ケア
木村真由美	高齢者施設における利用者主体のケア
平岩まいこ	介護保険前後における市民の意識変化について
増田公美	痴呆性高齢者のケアをよくするための取組み
水野由美子	ホームヘルパーの養成確保と求められる専門性
三原崇男	地域がおもしろい
好井栄一	高齢者の生活を快適にする介護
2005年度『「地域福祉」の分析・解題』	
相原純	地域福祉の推進と社会福祉協議会
植田亜由美	地域社会における高齢者虐待の現状と課題
加納大輔	地域福祉における介護保険制度の課題
川見寛之	地域福祉の沿革について
工藤一郎	高齢者の自立を支える福祉コミュニティの形成について
栗木雄	地域社会と福祉教育
栗山綾	地域福祉における障害者の自立支援—障害者の雇用と就労
高見真弓	地域福祉におけるボランティア活動の実際
瀧本早紀	地域福祉の活性化とNPO
兵藤理香	日本における保健医療ソーシャルワークの役割と変遷について
宮本佳奈	高齢者の自立支援に対する取組み
村田亜由美	地域福祉とボランティア
森由梨香	高齢者とケアマネジメント
山本百合香	高齢者の生きがいについて
2006年度『社会福祉のこころ学』	
飯島健太	精神障害者の社会復帰支援—長期在院者の退院支援について
宇都宮明香	知的障害者への支援—施設支援と地域支援のあり方とは
齋藤寛子	ソーシャルワークの専門性—社会福祉施設で働く職員のあり方について
在間慶子	ユニットケアの重要性—脱集団ケア 個別ケアにむけて
瀧口和樹	高齢者介護—その人らしさとは
田中和博	精神障害者の地域生活支援のあり方
二司典子	高齢者介護とコミュニケーション
東山あゆみ	利用者への援助者としてのかかわり方
前田麻美	自閉症児の理解と支援—自閉症児への関わり
松岡明日香	知的障害者の雇用について
湯川友貴	医療ソーシャルワーカーのバーンアウト予防対策についての研究
谷中仁美	利用者さんらしい生活を求めて—介護福祉士の役割
2007年度『社会福祉援助の可能性』	
大西のどか	福祉の担い手
澤井みづき	在宅福祉サービスと施設福祉サービスの比較
竹内久美子	ユニットケア導入による意義と課題
中口りえ子	医療ソーシャルワーカーの位置づけ—資格化と養成教育に焦点を当てて
中越未里	医療ソーシャルワークの専門性—地域医療連携と医療ソーシャルワーカーの役割
中本有華	その人らしさ—美容福祉と生きがい
中山友恵	高齢者のターミナルケアについて—施設でのケアと家族への支援
樋口香織	障害者の社会参加—障害者雇用の促進のために
丸山有香	ボランティアの条件
宮城貴弘	地域福祉における住民参加
山崎美佳	高齢者の生きがい支援
山居加代子	スクールソーシャルワークの方法—発達障害をもつ子どもへの介入
屋本祐希	ユニットケアの展開—十人十色な暮らしの支え方

II. 教育

教育は研究成果を還元する場・機会ともいえるが、筆者が担当した教育科目は単一ではない。教育科目は大きく講義科目と実習演習科目に分けられる。

講義科目では、筆者はこれまでに「社会福祉援助技術論B」（2003年度・2004年度）、「地域福祉論」（2004年度から現在に至る）、「社会福祉財政論」（2005年度）、「臨床福祉論」（2007年度から現在に至る）を担当している。これらの講義科目のうち、2003年度後期に担当した2年生科目「社会福祉援助技術論B」の初回授業の出来事が今でも忘れられない。本学の学風の1つなのかもしれないが、教室に入った瞬間に、筆者は学生たちに拍手で迎えられたのである。およそ300人が受講していた科目であった。

一方、実習演習科目では、これまでに「演習Ⅰ」、「社会福祉基礎演習」、「社会福祉援助技術演習」、「社会福祉援助技術現場実習指導」を担当している。このうち「社会福祉援助技術演習」は2004年度から2008年度までずっと担当しているが、短大時代も含めると担当経験年数は約8年と、もうすぐ10年目を迎えることとなる。そして「社会福祉援助技術現場実習指導」は年度によっては担当していない時期もあったが、短大での経験を含めると通算約6年となる。実習演習科目で最も経験が短いのは「演習Ⅰ」の半年間²⁷⁾を除けば、「演習Ⅳ」ということになる。

ここでは、学生にとって大学4年間の学びの集大成ともいえる、この「演習Ⅳ」の科目（以下、Ⅳゼミ）に焦点を当て振り返ってみる。卒業論文指導がメインとなるⅣゼミを筆者が受け持つようになったのは、筆者が本学に赴任した2003年度ではなく、2004年度以降であった。

筆者のⅣゼミでは毎年度末に“論集”として製本、発刊するようにしている²⁸⁾。これは時間と労力のかかる作業であるが、学生一人ひとりの努力の結晶としての成果物を何としても残しておきたいとの願いから継続してきている。これは筆者のゼミの特長の1つということができるかもしれない。そして、この実践を曲がりなりにも継続してこられているのは、本学の演習助成制度があり、事務局からの支援があるからに他ならない。

ところで、この論集には毎年、ゼミの共通テーマ²⁹⁾をタイトルとして付しており、この共通テーマのもとに集まったゼミ生たちの卒論タイトルはバラエティに富んでいてユニークなものも少なくない（表Ⅱ）³⁰⁾。ターミナル

ケア、高齢者ケア、ホームヘルパーの専門性、社会福祉協議会、地域福祉、福祉コミュニティ、福祉教育、ボランティア、ケアマネジメント、生きがい、地域生活支援、自閉症児支援、バーンアウト予防対策、美容と福祉、医療ソーシャルワーク、スクールソーシャルワーク、等々。

今後もその年々の時宜に合った適切なテーマ設定を行い、ゼミ生を募り、有意義なゼミ運営を側面的に図っていかねばと考えている。

III. 社会活動

社会活動の主なものとしては、既に過去のものとなった感もあるが、日本社会福祉士養成校協会研修委員会委員（2002年7月～2005年5月）、赤穂海浜公園管理運営協議会会長（2004年10月～2007年3月）の2つが挙げられる。現在までに至るものとしては、日本福祉図書館学会事務局長・理事（2007年4月～）、社会福祉法人はなさきむら評議員（2005年1月～）、西播磨地域ビジョン委員会専門委員（2005年4月～）、姫路市高齢者保健福祉計画および姫路市介護保険事業計画策定検討会委員（2008年7月～）などがある。研修会などの講師については5年間で20回以上を数える。

思い出深い体験なり経験はいくつもあるが、特に日本社会福祉士養成校協会研修委員会での出会い³¹⁾や日本福祉図書館学会への関わり³²⁾は、多くの学究諸家と知り合うきっかけとなり、自身の宝物になっている。同協会研修委員会の3年間で学び得たことの1つは、広く学内外を見渡そうとする視点である。換言すれば、全体的な視野から物事がみつめられることといえる。また、裏方の大変さはこの委員会に携わらなければ知ることでもなかったはずである。日本福祉図書館学会への関与にしてもこの裏方の働きの苦労を体験していたからこそ成し得ているものと思える。

おわりに

関西福祉大学という4年制大学での教員・研究生活の5年間で振り返ることはそれなりに意義深いものであった。ここで、研究者の仕事とは何か、教育者の仕事とは何かを確認してみる。

「研究者の仕事とは『まだ分かっていないことを人に分かるようにすること』である。これに対し、教育者の仕事は『すでに分かっていることを人に分かるようにす

ること』である。大学の教員は、この両方の仕事に関わっている」³³⁾。

この5年間で、上記の両方の仕事を成し遂げられているかどうかといえば心許ないものがある。だが、多くの周りの支えというものがあって頑張ってきている。したがって、今後も努力を積み重ねていかなければならないと考えている。特に2009年度から新設されることになった大学院修士課程の社会福祉学研究科では、筆者は「地域福祉研究特講」という新たな科目を担当することになっている。さらに2010年度には学部社会福祉専攻において「福祉設計論」という新たな地平を切り開かねばならない。

したがって、これまでの5年間の蓄積に新たな実績と経験とを積み重ねていくことにより、教育と研究の水準をよりグレードアップできればと考えている。そして余力があれば社会活動にも一定程度の力を注ぎたい。

なお、本稿では大学教員の仕事のうち、研究、教育、社会活動の3つを取り上げてきたが、大学運営について記すことはできなかった。これについては別の機会に譲りたい。

最後に、教育研究の現状課題と将来展望について触れてみたい。個人的見地からであるが、想いを形にしようとする努力が一定の評価となって返ってきていることは確かといえる。研究では著作が知らぬ間に雑誌などで推薦紹介されていることも体験し³⁴⁾、教育では学生が社会福祉援助できる資質を一定程度身につけていることがデータでしっかりと裏付けられていた³⁵⁾。このことは少なからず筆者の励みとなり、教育研究の原動力にもなっている。今後もより良質なものを目指していく基本姿勢に変わりはない。そして、学部的な見地を重ね合わせれば、とりわけ2008年度からスタートした、社会福祉専攻の福祉実践・福祉政策・福祉文化の3つのコース(=学問志向)による教育課程のより充実した展開と研究の推進が求められていると認識している³⁶⁾。今後、「支援と臨床」の実践、「企画と組織」の政策、「国際と教養」の文化を見据えた社会福祉学研究者としてのアイデンティティの獲得を自らに課してゆく所存である。それが今回5年間で振り返ってみての答えである。

注

- 1) ただし、辞典、書評、報告書、計画書などについては原則として集計から除外してある。
- 2) 井上深幸・趙敏廷・谷口敏代・谷川和昭『対人援助の基本と面接技術』日総研、2004年

- 3) 谷川和昭「社会福祉援助技術演習教育の実態と課題」韓国臨床社会事業学会創立国際学術大会(於:ソウル女子大学校)、2004年6月
- 4) 井村圭壯・谷川和昭編『地域福祉分析論』学文社、2005年
- 5) 趙敏廷・谷川和昭「ケア福祉とコミュニケーション技法」『大韓ケア福祉学』1(1)、2005年、pp.203-220
- 6) 趙敏廷・谷川和昭「介護福祉士養成における学生の介護意識に関する日韓比較研究」『介護福祉士』3(1)、2005年、pp.45-51
- 7) 「日本介護学会が第2回学会 研究成果もちより交流」『介護保険情報』5(11)、2005年、pp.84-85
- 8) 井村圭壯・谷川和昭編『地域福祉の基本体系』勁草書房、2006年
- 9) 谷川和昭編『地域福祉の概念分析』地域福祉推進研究会、2006年
- 10) 古川繁子編『地域福祉論』学文社、2006年
- 11) ロバート R. グリーン著、三友雅夫・井上深幸監訳『ソーシャルワークの基礎理論』みらい、2006年
- 12) 谷川和昭・井上深幸・趙敏廷「学生からみた社会福祉援助技術演習の教育効果」『日本看護福祉学会誌』11(2)、2006年、pp.95-106
- 13) 趙敏廷・谷川和昭「介護福祉士養成における学生の介護意識に関する日韓比較研究」『大韓ケア福祉学』2(1)、2006年、pp.136-148
- 14) 井村圭壯・谷川和昭編『社会福祉援助の基本体系』勁草書房、2007年
- 15) 秋山博介・井上深幸・谷川和昭編『臨床に必要な社会福祉援助技術演習』弘文堂、2007年
- 16) 谷川和昭「地域福祉に対するコミュニティワーカーの意識構造」『厚生指標』54(1)、2007年、pp.17-25
- 17) 谷川和昭「社会福祉援助からみた福祉の心での支援」『関西福祉大学研究紀要』10、2007年、pp.161-167
- 18) 井上深幸・趙敏廷・谷川和昭「社会福祉援助技術演習の教育傾向と課題」第20回日本看護福祉学会全国学術大会(於:京都橋大学)、2007年7月
- 19) 谷川和昭「地域福祉要件の分析と地域福祉論の創造」日本福祉図書文献学会第10回全国大会(於:高知県立総合看護専門学校)、2007年9月
- 20) 井村圭壯・豊田正利編『地域福祉の原理と方法』学文社、2008年
- 21) 谷川和昭「社会福祉の範囲と臨床」『関西福祉大学研究紀要』11、2008年、pp.127-134
- 22) 谷川和昭「福祉の心の構造化の試み」『メンタルヘルスの社会学』13、2007年、pp.50-57
- 23) 谷川和昭「福祉の心の構造化に関する予備的研究」韓国社会福祉学会春季大会(於:韓国光州大学校)、2008年4月
- 24) 谷川和昭「地域福祉学における『福祉の心』の位置づけ」日本地域福祉学会第22回大会(於:同志社大学)、2008年6月
- 25) 谷川和昭・趙敏廷「看護学生の福祉の心について」第21回日本看護福祉学会全国学術集会、2008年7月(於:西九州大学)
- 26) 谷川和昭「福祉の心へのアプローチの勧め」日本人間関係学会第18回関西地区会研修会(於:芦屋学園)、2008年6月
- 27) 2003年10月から2004年3月までの半年間、筆者は当時の学長代理として「演習Ⅰ」を担当したことがある。
- 28) 当時、本学の八窪清先生にこの方法を薦められたのである

が、実際に行ってみて良かったと感謝している。

- 29) 「共通テーマ」といっても、ゼミ生が執筆する卒業論文の題目は自由にもらっている。
- 30) 毎年、ゼミ生からは多くのことを学ばせてもらっている。今年度（2008年度）も、通算5冊目となる論集発刊に向けて準備を進めているところである。2008年度のゼミ内共通テーマは「社会と生活者の諸問題～福祉課題とその解決のための処方箋～」である。題目と執筆者名を挙げておくことにしよう。
「日本とアメリカの音楽療法から学べること」（有吉友美・大田朋未）、「高齢者の生きがいについての考察」（片岡愛）、「在宅医療をめぐる周辺の諸課題」（小出智美）、「中山間地域における高齢者福祉」（河野有紀）、「スウェーデンから学ぶ日本の高齢者福祉」（木下銀二郎）、「マザーに学ぶ日本のこれから～自殺予防への対応と方法～」（小西真由美）、「施設における高齢者虐待の実情と求められる対応～虐待のない施設にするために～」（中澤優子）、「認知症高齢者を支える地域ケア」（中村千春）、「高齢者と地域をつなぐ回想法」（野村志織）、「ノーマライゼーションの立場から考える自立生活」（八山彬史）、「障害者自立支援法と利用料問題」（山田慎一郎）、「認知症高齢者の理解に向けて」（東郷裕子）。以上13本。
- 31) 特に「2004年度全国社会福祉教育セミナー」では、その第2分科会で「ソーシャルワーカー養成教育における教員研修のあり方」につき発題者を務めている。この前後ぐら

いから筆者の顔見知りが増えていったということが出来る。小嶋章吾・船水浩行・保正友子・谷川和昭・山辺郎子・松川敏道「ソーシャルワーカー養成教育における教員研修のあり方」『社会福祉教育年報』25, 2005年, pp.73-94

- 32) 日本福祉図書文献学会は、1998年12月に創設された日本福祉士教育学会を前身とする学会であるが、その第9回全国大会が2006年9月23・24日の両日、本学で開催されている。慣れない大会事務局長の任にあたった筆者は、少なからぬ教職員に支えられた。当時の実行委員会スタッフ名簿をみると、敬称を略させていただくが、赤木正典、丸岡利則、岩間文雄、平松正臣、竹内美保、中村剛、服部伸一、岩本真佐子、榎田守子、夏山会未、細金美佐の各氏である。大学当局の後方支援もあり、本当にどなたにもお世話になり、言葉では言い尽くせぬほど今でも感謝している。
- 33) 酒井邦嘉『科学者という仕事』中央公論新社、2006年, pp.222-223
- 34) たとえば、『週刊社会保障』誌では、前掲書14)の講評に丸1頁が割かれていた。「この一冊『社会福祉援助の基本体系』井村圭壯・谷川和昭編著」『週刊社会保障』61(2436), 2007年, p.28
- 35) 谷川和昭・井上深幸・趙敏廷, 前掲論文12) を参照されたい。
- 36) 「社会福祉学部・専攻・コースの人材養成に関する目的及び教育研究上の目的」『学生ハンドブック』関西福祉大学, 2008年, pp.3-4